

本誌の表紙に使われた貴重書	2
ライブラリー・スケッチ	西村 玲奈 3

研究者と図書館

学生時代と図書館 81 「一原爆マンガを読みふけたところ」	中西久実子 4
佛蘭西書巡覧23	平山 弓月 5
世界をみつめて 3 「現代社会と難民問題」	荘中 孝之 6
中国のほんの話 (58) 「『中国を知るために』～憐愍の情なしには正確な中国認識は得られない～」	蔭山 達弥 7

OFFICE INFORMATION

オフィス・インフォメーション	8~10
本学図書館のスペシャル・コレクションより ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (32)	
「烈女、島山勇子を想うハーンとモラエスの話」	奥 正敬 11~12
寄贈図書案内	13
10月のピックアップコーナー「グリム童話」	照井菜穂子 14
社会に貢献した本学図書館の貴重書	14
秋の図書館を詠む	15

学外の皆様からのご支援

学生の通学手段 (1) 広く愛される自転車	安藤 紳次 16
「知られざる世界への挑戦」-学校法人 京都外国語大学 創立65周年記念稀観書展示会-を拝見して	花田 謙一 17

本誌の表紙に使われた貴重書

ADAM, Jules
Japanese Story-Tellers
Tokyo, 1899

ジュール・アダン著、オスマン・エドワーズ訳『日本の咄家』



本書は、フランス公使館員のジュール・アダンが咄家（落語家）と寄席について紹介した話を、オスマン・エドワーズが英語に翻訳して、フランス語版と同年に刊行したものである。

本書によれば、この本が書かれた明治32年頃には、東京に寄席は243軒あったという。扉絵に寄席の建物が描かれており、そこに掲げられた看板には三遊亭圓生、小圓遊といった名跡に混じり「英国人ブラック」とある。著者は本文中で「Mr. B...」と紹介するブラックに並々ならぬ関心を抱き、なんとか会おうと奔走したことや、神戸で彼の寄席を聞いたことなどを述べると共に、人気を博していたブラックを同じ欧米人として誇らしいと称賛しており、この「咄家の名手」となった流暢な日本語を話すイギリス人の紹介にかなりの頁を割いている。

他にも寄席には履き物を脱いで入場することや、観客席で入手出来る座布団、煙草盆、お茶、お寿司について、三味線の音で始まる「中入り」の様子といった寄席の環境を紹介し、前座と真打ち（てつまつかい 手品師）などの出演者のことから、一席の観料や出演者の報酬についてまで記している。日本の独特の名詞（例えば下駄、火鉢、中売り、落とし話など）はそのままローマ字イタリックで記し解説してある点も、著者の日本文化に対する見識の高さが窺える。

原寸 19.2×14.6cm

『文明開化期のちりめん本と浮世絵』（2007年本学図書館刊行）より抜粋